

評・三浦 佑之 (古代文学研究者
立正大教授)

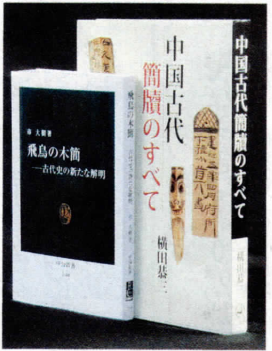
二か月ほど前に福岡県太宰府市の遺跡から、最古の戸籍に関する木簡が出土したというので大きなニュースになった。木簡というのは文字が書かれた木の板だが、今までに全国

歴史解き明かす墨の力

なことを知る手がかりをもたらず。日本ではもっとも古い時代の木簡だが、それが写真もまじえていねいに紹介される。行政的なことばかりではない。疫病が流行した時に、病氣平癒を願って作られたと考えられる呪符木簡なども多数出土しており、人々の切実な祈りが伝わる。

『飛鳥の木簡』は、飛鳥および藤原京で見つかった、おもに七世紀後半の、四万点以上の木簡をもとに、『日本書紀』などの文献では明らかにできなかった歴史、たとえば大化の改新に関する真偽、藤原宮の建物がいっごろ建てられたかというよう

市大樹著
横田恭三著



中公文庫 二玄社
860円 2800円

飛鳥の木簡 中国 古代 簡牘のすべて

で三八万点以上が出土し、文字資料の乏しい古代の歴史を解読するのに欠かせない史料となっている。

一方の『中国 古代 簡牘のすべて』は、中国各地で出土した簡牘をカラー写真で紹介したきれいな本。中国では木簡だけではなく竹簡も多く、それらをあわせて簡牘と呼ばれる。収められている簡牘は墓からの出土品が多く書体も内容も立派で、ゴミとして捨てられたものから文字を探し出す日本の木簡とはずいぶん印象が異なる。単純な比較などできないが、今後増加すると思われる朝鮮半島の出土品も加えて、東アジアにおける総合的な研究ができれば、より大きな成果が期待できるだろう。

荷札に使ったり、カードのように並べ替えて整理するのに便利で、表面を削ればくり返し使える木簡には紙にはない利便性がある、さまざまな用途に利用される。時には落書きをしたり文字の練習をしたりもする。その削り屑や不要になった木簡が土中に棄てられ、掘り出されたものが古い時代を知るためのよすがになる。墨という消えない素材の威力であり、読めない字も読める現代の技術力が加わり、研究者の地道な努力が報われるのである。

◇いち・ひろき 1971年生まれ。
大阪大准教授◇よこた・きょうぞう 54
年生まれ。跡見学園女子大教授。